

Q&A

お墓の に答えます

蒲池勢至





お墓の



著者 浦池 勢至（がまひげいし）
（民俗学者・同朋大学仏教文化研究所研究顧問）

1951年愛知県生まれ。同志社大学文学部文化史学科・同朋大学文学部仏教学科卒業。博士（文学）。専攻は民俗学。同朋大学仏教文化研究所研究顧問、元同朋大学特任教授。真宗大谷派名古屋教区長善寺前住職。著者に「探訪 真宗民俗―儀式の伝承と現代社会」「命終―亡き人のゆくえ」共に東本願寺出版などがある。

に答えます

絵・北村人

Q1 「お墓」って昔からあるものなのですか？

Q2 方角など、気を付けた方がよいことはありますか？

Q3 墓石に刻む言葉は何がよいですか？

Q4 お墓への納骨はいつ頃がよいですか？

Q5 納骨時に、お坊さんにお経を読んでもらうほうがよいですか？

Q6 お墓とお内仏（仏壇）には、どういふ違いがありますか？

Q7 納骨後のお墓参りは、いつ、どのようにすればよいですか？

Q8 「樹木葬」、「納骨堂」、「合葬墓」。どういったものですか？

Q9 「墓じまい」をしようかと悩んでいるのですが……。

Q10 「樹木葬」や「散骨」などの新しい方法でもよいですか？

真宗本廟と大谷祖廟

お浄土とは何ですか？

※本書は月刊誌「同朋」（東本願寺出版）2024年7月号に掲載した「Q&A」に加筆修正を行い、コラム2本を加えて冊子化したものです。なお、「Q」は編集部がまとめました。

昔からあるものなのですか？

石塔が一般化するのには江戸時代からです。

そもそも「お墓」とはなんでしょう。石塔の下に遺骨を埋葬して、死者や先祖をお参りする形態が「お墓」だとイメージされていると思います。これは、いわゆる「石塔墓」です。しかし、遺骨や遺体を埋葬（かつての土葬）した上に「石塔を建てる」形態は、お墓の歴史をみますとそれほど古くからではありません。

紀元前の縄文・弥生時代の「お墓」は、大きな甕の中に遺体を入れて埋葬する「甕棺墓」、遺体を埋葬して方形の塚を築き、周りに溝を巡らした「方形周溝墓」でした。3〜5世紀頃の古墳時代には、台地や丘陵斜面に横穴を掘った「横穴墓」がありました。大きな古墳は天皇や権力者の墓です。平安時代末期（12世紀末）にできた『餓鬼草紙』には、遺体を埋めた塚（墳墓）の上に卒塔婆や五輪塔が描かれています。しかし、棺や死の間際に生きたまま放置されたとみられる遺体も描かれていて、餓鬼や犬が屍骸と人骨をまさぐっています。庶民では野捨てにちかい「遺棄葬」もありました。

塚の墳墓に建てられた五輪塔などは「お墓」ではありません。五輪塔の五輪とは「地・水・火・風・空」といって、仏教では世界や人間を構成する五つの要素であると説明されます。五輪塔は「仏」を表していて、遺骨や遺体の上に安置して死者を供養している石塔です。つまり石塔＝墓（墓石）ではなく「供養塔」でした。丘陵の雑木林で発掘された「一の谷中世墳墓群」（静岡県磐田市）は、平安時代の終わりから中世末期までのお墓でしたが、ほとんど石塔は出土していません。庶民の墓は遺骨を埋葬して丸石を敷き詰める形態で、あたかも「賽の河原」のような光景でした。

死者や先祖を祀る「お墓」としての石塔が一般化するのには江戸時代からです。それでもまだ一部の富裕層しか墓を持ってませんでした。ごく普通の人々が墓（石塔）を造るようになったのは、明治以降といってもよいかもしれません。かといって庶民には墓がなかったのではなく、遺体や遺骨を埋めた埋葬「墓地」はありません。